

レースっていいよね
第57回「執念」の巻

大ちゃんが、あの加藤大治郎選手が逝ってしまった。
WGP、MOTOクラスで日本人チャンプを狙える、最も才能に満ち、かつ、魅力的で偉大、しかも愛すべきキャラクターのレーサーだった。

くしくも後トちゃんから今日という日が、セナの命日である事も知らされた。
そうか、そうだった。
でも、偉大なレーサーの死を取り上げるつもりではなかったのだが……。

もう随分前のような気がする、のだけれど。

マカオ F-3 に、M・ハッキネンとM・シューマッハが出演していたとき、感じたことがある。
勿論、その頃はひとりのレースファンとして、そのレースの様々を見ていた。
当時から両者はその輝かしい才能をアピールし、周囲から一歩抜きん出た存在であった
コトは紛れも無い事実である。

あのレースの第2レグで、リードを守るシューマッハが最終ラップで、スリッパから抜けた
ハッキネンと接触、そのままシューマッハはチェッカー、ハッキネンはクラッシュしてリタイヤした。
このアクシデントを見たとき、当時の私は「シューマッハ汚ねー！」と憤慨した。
ストレートでスリッパから抜けたハッキネンの方へ、ラインを寄せたからだ。

もう10年以上も昔の話だが、レースに携わる今にして思うことがある。

あれはレーサーという立場なら、間違い無くシューマッハが正しい。
いや、正誤で語れるものではないが、勝負をしている立場なのだから、あの場面で寄せるのは
ごくごく自然な成り行きであると思う。

むしろ、第1レグを圧勝していたハッキネンは、そのタイム差を活かして無理をせず、シューマッハ
に付かず離れずでチェッカーさえ受けていれば、ハッキネンの完全勝利、となり得たのである。
ハッキネンがあそこでスケベ心を出して、無理にスリッパから出た辺りに、精神面での脆さ、というか
計算の甘さを感じてしまう。

対して、シューマッハの何としたたかな事か。
心臓の強さというか、人間として、レーサーとしての確たる芯を垣間見れる。
こういうレースへの取り組みのひとつひとつが、近年のフェラーリの強さに結びついている事は
疑う余地も無い。

無論、これらは人間性の好き・嫌いでは無く、あくまで勝てる、理想のレーサー像の一般論である。
だから容姿、国籍、性格などは全く考慮していない。
個人的意見を沿えるなら、ハッキネンもシューマッハも、別に好きではないからだ。
しかし、「どちらが、よりスゴイレーサーか？」という問いには、間違い無く「シューマッハ」と答える。

勝つために何をすべきか、を常に考えるドライバーは本当にスゴイ。
それは勝負への執着、執念なのである。勝てるか、負けるか。この違いはとても大きい。
周囲から何と言われようと、成績を残した方が勝ち、なのだ。
この点において、シューマッハは当時から、もう既に成熟したレーサーだった、と言えるのだろう。

執念といっても、難しいのは、マシンなどのハード面ばかりに執着するのではなく、ドライバー本人のメンタリティーや、スキルと言ったソフト面とも両立されなければならないところにある。そのためにはやはり、十分に走り込む必要があるし、そうなると大金も要する。金を作るには、また別の努力も要る。極論をいうなら、それも才能なのだろうか……。

レーサーという存在をダイアグラムとするなら、各ファクターをより高い基準でバランスさせるほど、勝てる裏付けになる訳だけど、そのためには何より、異常とも言えるレースへの執念が不可欠だ。

そんななかで、2輪とりわけ WGP のレーサーはみんな好きだ。

執念が人一倍強く、勝負にシビアである割に、それぞれのキャラクターが魅力的で、必要以上のギスギス感も無い。お茶目で、ユーモアに溢れ、気さくで、人間的。いや、これは所詮、外から見た外観に過ぎないのかもしれない。

それでもいい。

私自身にとって、自分の関わるレース以外のレーサー達の中で、大ちゃんはとても魅力のあるレーサーとしても人間としても好きな、稀な存在だった。この喪失感は大い。

(01May03)

